2014年度
活動報告書

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

2014年度
活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for Liberal Arts

はじめに

新体制の発足にあたって

教養研究センター所長　小菅隼人

2014 年 10 月 1 日より、不破有理教授から教養研究センター所長職を引き継ぎました小菅隼人です。2002 年 7 月の開所以来四代目の所長になります。不破先生からは、2013 年秋に新所長の打診を受けましたが、それ以来、先生は、進行中の全ての事業と人事について新体制への準備を整えて下さいました。おかげで、10 月の所長職就任以来、その忙しさには驚きましたが、困ることは一切ありませんでした。そして、今日まで、私の至らなさにも我慢して黙って見守ってくださり、折に触れて遠慮がちにアドヴァイスを下さいました。温かいお心遣いに深く感謝しております。また、不破先生と共に副所長としてこれまで教養研究センターを支えてくださった種村和史教授、篠原俊吾教授にも御礼を申し上げます。ありがとうございました。事業のスムーズな移行を助けるために留任してくださった大出敦教授、新副所長の片山杜秀教授、工藤多香子准教授には、副所長就任をお引き受け下さったことに御礼を申し上げるとともに、これから何卒よろしくお願い申し上げます。

さて、所長就任にあたって私の最初の仕事がホームページ上での「所長挨拶」でした。それには、私の教養研究センターへの想いを込めたつもりです。引用させていただき、最初の活動報告書の巻頭挨拶とさせていただきます。

現在、多くの大学に「教養教育センター」や「生涯学習センター」が設置されています。しかし、慶應義塾大学教養研究センターは、日本で殆ど唯一の教養のための研究センターです。「教養」は人間にとって絶対に必要なものでありながら、いまだその形式も機能も目的も明確に答えられる人はいません。例えば、マシュー・アーノルド は Culture and Anarchy（1882）において「教養」を「文化」（Culture）と捉えました。また、T. S. エリオットは、“What is a Classic?”（1944）というエッセイの中で、「教養」を「成熟」（Maturity）という言葉で表しました。さらに福澤先生のいう『学問のすすめ』は、まずは学ぶ姿勢の奨励という意味で「教養」の勧めであると私は捉えています。いずれも、「教養」を直観的に言い表したものですが、教養研究センターの最大の目的は、「教養とは何か？」「教養はどの様な役割を果たすのか？」「教養は何のために必要か？」という疑問に明確な答えを与えられるだけの研究を行うことだと私は思っています。

教養研究センターはこれまで、様々な方法で教養教育の実践に取り組んできました。そこでは、「アカデミック・スキルズ」のように新しい方法での初年次教育を展開しているものもありますし、さらに、「日吉学」や「身体知」のように学部教育でこぼれ落ちた分野を掬いあげるもの、「生命の教養学」や「情報の教養学」のように従来の科目群では追い付いていけない新しい分野を取り込んでいくものもあります。あるいは、HAPP、カドベヤ、日吉キャンパス公開講座など地域連携の実験的実践が行われてきました。さらに、山形県鶴岡市のご厚意で、単なる座学ではなく、豊かな生命の営みを実感しつつ「生きる意味」を考える「庄内セミナー」という非常に意義深い試みが行われています。教養の意義と輪郭を研究活動によって明らかにするとともに、理想の教養教育の方法と内容を実践によって模索することは、当センターの大きな役割であり、これからも積極的に取り組んでいきたいと思います

教養は、例えば医療と同じく、それが人々にとってなくてはならないものであると同時に、社会全体

にとってもなくてはならないものです。教養は、専門技術に比べて、とかく役に立たないものと見なされることが多いですが、それは間違っています。かつて、全てを奪われ監禁された南アフリカの政治犯は、音楽、美術、演劇、文学などの教養（Humanities）が、人間にとって不可欠なものであり、「食べ物よりも重要だったことを確信した」と発言しました（デイヴィッド・シャルクウィック による国際演劇学会での基調講演より、ウォリック大学、2014 年）。豊かな精神の涵養は、すでに生死の問題とも言えるのです。教養研究センターは、教養とは何かという問題について正面から向き合い、実践的に教養研究を展開し、それを教育に還元し、また、広く社会に公開してゆかなければなりません。教養研究と教養教育、そして、その為の基盤整備は、豊かな個人を育てるために、大学としての必須の活動であると私は信じています。皆さまのご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

ここに 2014 年度の活動報告書をお届けいたします。所長交代の時期にあたり、2014 年前半は不破所長の下での、2014 年度後半は小菅の下での活動となります。ご一読いただき、教養研究センターへのご助言、ご提案をいただけば幸いです。

目　次

はじめに　03

組織構成と事業計画（2014 年度）　06

2014 年度事業報告　07

広報・発信　10

Ⅰ　研究関連プロジェクト

1　学びの連携プロジェクト　12

2　情報の教養学　13

Ⅱ　教育開発関連プロジェクト

1-1　アカデミック・スキルズ　15

1-2　身体知：創造的コミュニケーションと言語力　16

1-3　身体知・映像　17

1-4　生命の教養学　18

1-5　身体知：音楽　19

2　実験授業　20

3 「学び場」プロジェクト　22

4-1　教員サポート講演会　23

4-2　研究の現場から　24

5　庄内セミナー　25

Ⅲ　交流・連携関連プロジェクト

1　カドベヤ　27

2　日吉行事企画委員会（HAPP）　28

3　日吉キャンパス公開講座運営委員会　30

資料編

1　教養研究センター運営委員会委員　32

2　教養研究センター組織構成員　33

3　2014 年度の主な活動記録　35

※Ⅰ～Ⅲの分類は機能カテゴリーであり、センター内部の組織ではありません。1 つのプロジェクトが複数のカテゴリーに属することはありますが、本報告書では便宜上、各プロジェクトを 3 つのカテゴリーのいずれかにまとめました。

教養研究センター組織構成と事業計画（2014年度）

教養研究センター運営委員会

外部評価

コーディネートオフィス

所長・副所長・事務長
コーディネーター（事業推進者）

所長・副所長会議

広報担当

副所長の1名が代表を担当し、
コーディネーターおよび事務
スタッフと協力して遂行

Ⅰ．研究関連プロジェクト
- 1.基盤研究
  - 1）大学教育カリキュラム
  - 2）多様なリテラシー
    - ①学びの連携
    - ②身体知
    - ③情報リテラシー
  - 3）社会・地域連携のあり方
- 2.特定研究
- 3.一般研究（2014年度はなし）
- 4.研究成果公表・外部発信
  - 1）研究報告会
  - 2）特別セミナー・シンポジウム等
  - 3）学会・ワークショップ等の開催援助
  - 4）選書、刊行物
  - 5）その他

Ⅱ．教育開発関連プロジェクト
- 1.設置科目
  - 1）「アカデミック・スキルズ」
  - 2）「生命の教養学」
  - 3）「身体知：創造的コミュニケーションと言語力」
  - 4）「身体知・音楽」
  - 5）「身体知・映像」
- 2.実験授業
  - 1）身体知実験授業
  - 2）リテラシー実験授業
  - 3）庄内セミナー
  - 4）日吉学
  - 5）その他
- 3.「学び場」プロジェクト
  - 1）ピア・メンタリングシステム
  - 2）ピア・メンター自主企画
- 4.教員サポート
  - 1）教育
  - 2）研究 「研究の現場から」シリーズ
  - 3）交流 「研究の現場から」シリーズ

Ⅲ．交流・連携関連プロジェクト
- 1.センターとしての地域・社会連携の取り組み
  - 寿拠点「カドベヤ」
- 2.日吉行事企画委員会（HAPP）
- 3.日吉キャンパス公開講座

コーディネート・オフィスは、運営委員会の付託を受けて教養研究センターの日常的な活動を執行する機関です。約20名のコーディネーターから構成されています。 所長・副所長・事務スタッフに加え、教養研究センターの極めて多彩なプログラムを統括する代表や中心メンバー、学部や関連研究所からのメンバーが加わっています。教職一体での運営というのが教養研究センター設立からの理念ですが、これを実行しているのがコーディネート・オフィスです。

2014年度
事業報告

詳しい報告は各項目に譲るとして、ここでは、当初計画による形式上の分類に捉われず、内容から全体を概観して、研究活動、設置科目、実験授業、啓蒙サポート活動、地域連携活動として概要を述べる。

1. 研究活動について

古来、「教養」は常に「教育」と結びついてきた。その意味で、教養「教育」は、実践的な教養「研究」の出発点であり到達点であると言ってもいい。そして、この点を踏まえ、現在の教養研究センターは、多彩でユニークな教育活動の創造・展開に大きな重点が置かれている。これを継承し、今後、さらに教養教育を充実させることは当センターの使命を実現する有効な手段になると考える。しかし、それと同時に、所謂「教養」という概念を明確化する学問的研究活動については、いまだ、手が付けられていないのが実情である。このことを省みて、今後の課題としたい。また、「大学教育カリキュラム研究」については、今年度は特段の研究活動はないが、上記の視点から大学における教養とカリキュラムの関係の重要性に鑑みて、今後も教養研究センターの事業として継続する予定である。また、地域連携・交流に分類される、庄内セミナー、日吉学、カドベヤなども、社会地域連携のあり方を実践的に研究する試みになっている。これらの活動を研究成果として纏めることは、それをさらに発展させ、より豊かなものにするために必要であり、また、きわめて有効な手段にもなろう。これらの事業の実施と並行として研究成果発信にも繋げていきたい。

2. 設置科目について

(1)「アカデミック・スキルズ」

教養研究センターの教育活動の中で、最も大きな位置を占める「アカデミック・スキルズ」は、前年度同様、「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」3クラス、「アカデミック・スキルズ（英語）Ⅰ・Ⅱ」1クラス、合計4クラスが開講された。また、学生主体の「プレゼンテーション・コンペティション」と「論文コンペティション」も実施され、さらにこの授業の充実化がはかられた。

(2)「生命の教養学」

「性」を2014年度のテーマに、オムニバス講義が行われ、11名が登壇した。前年を20名上回る60名の受講者によって、性を教養という観点から再検討する講座となった。まさに、学部教育では扱いきれない総合的な観点から、私たちの生命現象に必ず伴う「性」の問題に正面から取り組む講座となった。

(3)「身体知」

2014年度は、武藤浩史（法学部）、横山千晶（法学部）を担当講師として、8月13日から18日までの集中講義として実施された。担当者執筆のテキストを用い、最初の3日間は学問的視点や方法を実習し、3日目後半から身体ワークショップを行った。

(4)「身体知・音楽」

「身体知：音楽Ⅰ・Ⅱ」は、教養教育の一環として音楽芸術の良き理解者を、未来社会に派遣するということを目指している。2014年度は、ブクステフーデによる受難の音楽《われらがイエスの御身体》全曲演奏会を含む計6公演を催した。

(5)「身体知・映像」

定員20名のところ、二倍以上の人数の学生たちが申込み、学生たちの映像リテラシーに寄せる関心の高さをうかがわせた。同じ文学作品をふたつのグループで映像化する試みによって、グループワークにおいて集団制作の技術をも学ぶことができた。

3. 実験授業について

(1)「アーサー王研究会」

アルフレッド・テニスン『シャロットの女』の精読から創作へ」：テキストを精読、鑑賞し、さらにそれを解釈、発信することによって、芸術鑑賞の方法を学ぶ講座である。具体的には、自由研究セミナー「アーサー王研究会：アルフレッド・テニスン『シャロットの女』の精読から創作へ」において、春学期はAlfred Tennyson　の“Lady of Shalott”　の詩、秋学期は夏目漱石の『薤露行』を精読し討論を重ねた。学生の作品は「アーサー王研究会創作文庫」として冊子体とWeb版で公開している。

(2)「シェイクスピアを遊ぶ！」

6回目を迎え、今年度は、「から騒ぎで大騒ぎ？（Much Ado About Shakespeare: Creating Comedy from Much Ado about Nothing）」を副題としてコメディ『から騒ぎ』を題材とした。去年と同じく、オクスフォー

ド大学から古代史の教授のニール・マクリン氏のほか、アンナ・モルモドーロ氏も講師に加わった。

4. 啓蒙・サポート活動について

(1)「日吉キャンパス公開講座」

日吉の知を広く社会に公開する代表的活動としてこの講座がある。主として一般を対象とした有料の公開講座である。2014年度は「言葉と想像の翼」をテーマとして、10月4日から12月6日まで8週、計16名の講演を行った。例年にもまして多くの申込を受け、このテーマに対する関心の高さを伺わせた。

(2)「情報の教養学」

主として学生を対象として、教職員・一般にも開いた講座である。2014年度は「データから情報へ」をテーマとした。世の中に氾濫しているデータはそのままでは役立たないため、それを意味のあるデータに変えたときの新たな発見や研究に関する講演会を6回、ワークショップを1回実施した。各回とも聴衆が熱心に講演者の話を聞き、質疑討論も活発に行われた。ほとんどの講演はYouTube上で公開されている。

(3)「教員サポート講演会」

教員を対象とした啓蒙活動である。2015年1月13日には、教養研究センターと日吉学生部（学生相談室）との共催で、「学生相談室における発達支援――学生の生きる『現実』と『心』の世界――」が行われた。

(4)「多様なリテラシー・学びの連携」

主として学生を対象として、教職員・一般にも開いた講座である。3年目の活動として、3回のワークショップを開催した。「本の世界への探索法」（7月5日）、田村次朗氏によるワークショップ、井庭崇氏によるパターン・ランゲージのワークショップである。多様なリテラシーを学び、紹介する活動が行われた。

(5)「学習相談」

学生を対象として、日吉メディアセンターと共同して行われているこの事業は、学生が自ら教えることで学ぶ「半学半教」の精神に基づき、教職員のサポートによって学生主体で行われている。慶應独自の学びの形を実践する事業として、また、「教養の方法」を模索する企画として意義あるものと考えている。

(6)「研究の現場から」「学会・ワークショップ支援」

教養研究センターは、教職員を対象として、日吉キャンパスでの研究教育活動を活性化する様々支援活動を行っている。これは、当センターが支援することで所謂「ハブ」となって教職員を繋ぎ、教養の基礎概念である「多様性」のあり方を実現・模索するための試みである。詳しくは本文に譲るが、今後も継続させたい事業であると考えている。

5. 地域連携活動について

(1)「庄内セミナー」

教養研究センターでは山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパスを拠点として2008年以来、09、10、12、13年度、そして6回目を迎える2014年度も引き続き未来先導基金公募プログラム「庄内セミナー」として開催した。教養研究センターの活動の中でも、特に大きな成果を生んだ活動と自負している。地域と大学が一体になって学生を教育し、新たな教育方法として今後、他大学へも一つのモデルであり、その意味では、単なる地域連携・交流活動ではなく、また教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。

(2)「日吉学」

2013年開始した「日吉学」は講義とフィールドワーク、グループディスカッションによって知識を体験と結び付け日吉の自然、地理、歴史を総合的に学ぼうという試みである。「日吉学」は実験授業に位置付けられ、授業形式・参加学生の年齢構成・教授陣の多様さに特徴がある。本プログラムは未来先導基金に採択され、日吉の新しいキャンパスマップに日吉学の成果が盛り込まれて刊行されたことも2014年度の大きな実りといえる。漢字の「塾」が土壁に囲まれた一つの場所を表わすものであるとすれば、学びの場は一つの共同体を作るものであるはずである。そうであるならば、まず自分の居場所を確立することから始めることが必要であろう。そのことを再認識する講座として価値あるものと考えている。

(3) 日吉行事企画委員会（HAPP）

1990 年代初めにはじまった入学歓迎行事は、日吉の各教員、職員、学生を繋ぎ、学部教育からこぼれ落ちた知を結びつける活動の受け皿として、その後、日吉行事企画委員会となり、今日の教養研究センターの一つのルーツとなった。具体的には、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は公募企画行事を行っている。新入生歓迎行事は、HAPP 主催の公開行事を企画し、それぞれのイベントは、主として依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだものである。秋学期の公募企画では、塾生・教職員から企画を募集し、応募された企画の中から HAPP が審査の形で選抜を行い、実行まで教職学生が実施まで一体となって行う活動を展開している。

(4)「カドベヤ」

2010 年 4 月にコトラボ合同会社と慶應義塾大学により共同で設立されたオルタナティブスペース「カドベヤ」も継続中の重要な地域連携活動である。本文であげられる 4 点を目的として、学部教育では扱うことが難しい地域連携を中心とした教養研究センターならではの活動を展開した。「日吉学」同様、新たなコミュニティの創出という意味で、単なる地域連携・交流活動ではなく、また教育活動の枠にとどまらず、教養研究活動として位置付けられると考えている。

6. その他：特に広報発信活動について

教養研究センターにとって、出版やウェッブサイトでの知の公開は社会的使命であると考える。すでに、ニュースレターの発行、事業のアーカイブ化などを積極的に行っているが、なお、センター出版活動、ホームページ等の充実。拡充は今後とも進めていきたい。なお、2014 年度後半にホームページ英語版の制作に着手し、2015 年度にリリースする予定である。

（小菅隼人）

大学カリキュラム研究

大学教育カリキュラム研究については、昨年度学期制問題についての研究・勉強会を行ったが、今年度は新たな課題が見当たらなかったため、活動を見合わせた。

（佐藤望）

広報・発信

教養研究センターでは、実施する研究・教育活動に関する最新情報を、ウェブページを通じて随時発信している。また、各種イベントや講演を企画する際には、毎回ポスターとチラシを作成し、広報に努めている。

一部の活動成果については書籍として出版もしている。2014 年度の当センター刊行物は以下のとおりである。そのうち、極東証券寄附講座関連の書籍については、『アカデミック・スキルズ学生論文集』をのぞき、慶應義塾大学出版会ウェブページで書誌情報閲覧および購入が可能である。それ以外の教養研究センターの刊行物は、当センターのウェブページで閲覧可能である。

≪教養研究センター 2014 年度刊行物≫

1. Newsletter（ニューズレター）

主に日吉所属の教職員とセンター所員への広報が目的の Newsletter は、年 2 回発行している。

■ 24 号 2014 年 5 月 15 日発行

■ 25 号 2014 年 11 月 30 日発行

2. CLA アーカイブズ

2015 年 1 月 13 日に開催された教員サポートワークショップの報告書を CLA アーカイブズとして発行した。

■ CLA アーカイブズ 31

「学生相談室における発達支援──学生の生きる「現実」と「心」の世界──」2015 年 3 月 31 日発行

3. 極東証券寄附講座関連

【アカデミック・スキルズ】

■『アカデミック・スキルズ学生論文集』2015 年 3 月 31 日発行

センターが力を入れる設置授業の一つである、少人数制授業「アカデミック・スキルズ」では、学生が提出した論文を学生自らが編集した論文集を、2005 年度より毎年発行している。

■慶應義塾大学教養研究センター監修・慶應義塾大学日吉キャンパス学習相談員著　アカデミック・スキルズ『学生による学生のためのダメレポート脱出法』2014 年 10 月 30 日発行

アカデミック・スキルズを履修した経験のある学生が、現在、学習相談員として後輩にアドバイスする活動をしている。彼らがレポートの書き方について執筆した本を出版した。

【生命の教養学】

■教養研究センター、高桑和巳編『新生』2014 年 7 月 31 日発行

毎年異なるテーマでオムニバスの講義を展開する「生命の教養学」は、講座の内容を書籍にまとめている。今年度は 2013 年度の講座を書籍として発行した。

4. 報告書

■「教養研究センター 2013 年度活動報告書」2014 年 8 月 22 日発行

■「庄内セミナー　2014 年」(2014 年度未来先導資金公募プログラム）2014 年 11 月 25 日発行

5. 教養研究センター選書

教養研究センター選書は、所員からの原稿を毎年募集している。2014 年度も応募があったが、審査の結果、残念ながら出版にはいたらなかった。

（工藤多香子）

2014 年度教養研究センター

刊行物一覧

Newsletter24 号
（2014.5.15 発行）

Newsletter25 号
（2014.11.30 発行）

CLA アーカイブズ 31
（2015.3.31 発行）

2014 年度アカデミック・スキルズ
学生論文集
（2015.3.31 発行）

アカデミック・スキルズ
『学生による学生のための
ダメレポート脱出法』
（2014.10.30 発行）

2013 年度極東証券寄附講座
「生命の教養学」講義集
（2014.7.31 発行）

2013 年度活動報告書
（2014.8.22 発行）

庄内セミナー 2014 年
（2014.11.25 発行）

1 学びの連携プロジェクト

3 年目に入った「学びの連携」では、3 回のワークショップが開催された。

新たな試みとして「本の世界への探索法」ワークショップを企画した(7 月 5 日(土))。和洋の古い書物に直に触れ、形態、用紙、文字など、書物のモノとしての様々な特徴に注目することにより、本に関わった人々の思いや時代状況など豊かな世界を知ることができる。このワークショップは、前半で慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の住吉朋彦氏と一戸渉氏を講師に江戸時代の和本、後半で文学部の徳永聡子氏を講師に装飾写本以来の貴重な洋書を教材にして、本との接し方を体験することを目的として開かれた。情報技術の進展により、すべての情報がデジタル化されつつある現在、我々はともすれば知識を情報としてのみ考え、本来それを取り巻いていた様々なモノとコトとを忘れがちであるが、モノ自体に触れることによって、バーチャル化された情報だけからは知り得ない様々な事柄を体感とともに知ることの大切さにふたたび目を向ける必要がある。このワークショップはその一つの試みである。

ケース・メソッド、システムズ・アプローチなど、主に社会科学系の教育の場で開発されてきた新しい教育メソッドを体験するワークショップも引き続き行われた。11 月 8 日（土）には、法学部の田村次朗氏によるワークショップが開催された。ケース・メソッドを用いて、単なるテクニックに止まらない、人間理解を促進し創造的な合意形成を目指す「交渉学」を体験した。1 月 24 日（土）には、SFC の井庭崇氏によるパターン・ランゲージのワークショップが開催された。日本における第一人者を講師に、個人的な経験をパターンによって捉え直し共有知とするために作られた言語、パターン・ランゲージの全体像を学ぶとともに、パターン・ランゲージを用いた対話によって、一人一人の経験が融合し、生き生きとした未来を生み出す力を持った知へと生まれ変わるダイナミズムを体験できた。

創造性にあふれる教育メソッドを、学問分野やキャンパスの違いを超えてお互いに共有し、慶應義塾の教育力をより高めることをめざし、「学びの連携」は今後も様々な取り組みに挑戦していきたい。

（種村和史）

本の世界への探索法

交渉力体験ワークショップ

パターン・ランゲージワークショップ

2 情報の教養学

「情報の教養学」は、近年の高度情報化社会の急速な発展における最新の話題を提供することを目的とした講演シリーズである。2014 年度は「データから情報へ」をテーマとした。世の中に氾濫しているデータはそのままでは役立たないため、それを意味のあるデータに変えたときの新たな発見や研究に関する講演会を 6 回、ワークショップを 1 回実施した。

春学期の第 1 回目では、茂木健一郎氏（ソニーコンピュータサイエンス研究所）が教育という観点から様々な考えを紹介した。第 2 回では、永野智久氏（総合政策学部）がサッカーを対象にどのようなデータがあり、どのように利用されるかについて解説した。ちょうどブラジル開催のワールドカップ直前ということもあり、聴衆は大変興味深く聞き入っていた。第 3 回では、新保一成氏（商学部）が貧困をテーマに講演した。ご自身の研究の中におけるデータの取得から、それに対する統計処理などについて紹介した。

秋学期では、第 4 回において赤倉優蔵氏（日本ジャーナリスト教育センター）がデータジャーナリズムという報道の手段について解説し、それがどのようにニュースや報道に影響していくかについて言及した。この第 4 回講演と連動して、赤倉氏は藤代裕之氏（日本ジャーナリスト教育センター）と共にデータジャーナリズムを体験するワークショップを開催した。第 5 回は、河野武司氏（法学部）が計量テキスト分析という、様々な文章をどのようにコンピュータソフトを用いて分析できるかについて解説した。最後に、第 6 回は、平手勇宇氏（楽天技術研究所）が企業の電子商取引においてどのようにデータが活用されているのかを紹介した。

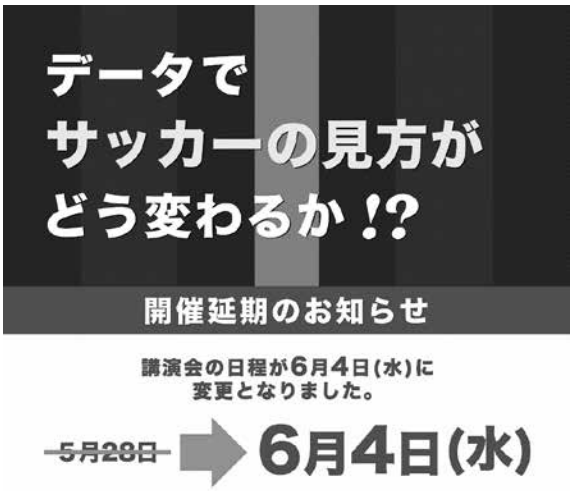
参加者数は第 2 会場を設けるほど大盛況の時もあれば、空席が目立つ回もあった。しかし、共通していたのは各回とも聴衆が熱心に講演者の話を聞き、質疑討論も活発に行われた点である。

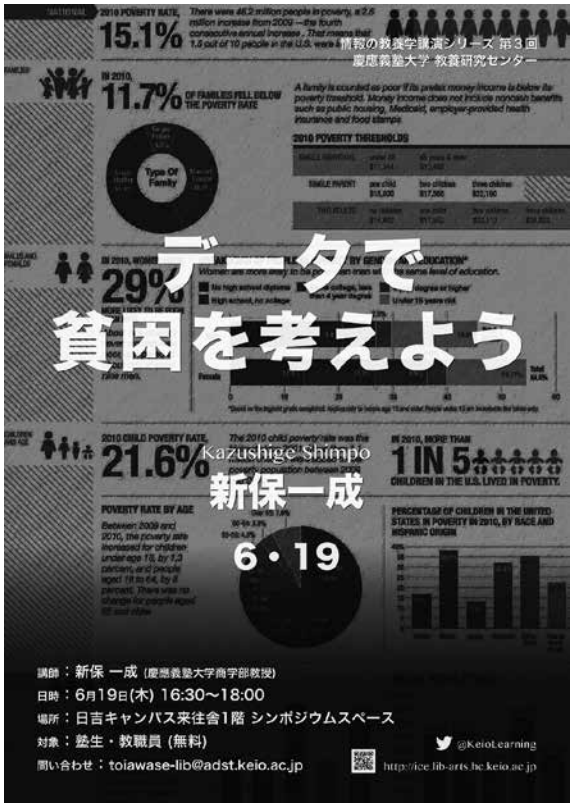
ほとんどの講演は YouTube 上で公開されており、情報の教養学のホームページ（http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp/）から視聴できる。

（高田眞吾）

2014 年度 情報の教養学

ポスター一覧




情報の教養学講演シリーズ 第3回
慶應義塾大学 教養研究センター
データで
貧困を考えよう
Kazushige Shimpo
新保一成
6・19
講師：新保 一成（慶應義塾大学商学部教授）
日時：6月19日(木) 16:30〜18:00
場所：日吉キャンパス来往舎1階 シンポジウムスペース
対象：塾生・教職員（無料）
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
@KeioLearning
http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp

TOO BIG TO KNOW?
計量テキスト分析のすすめ
テキスト化されている新聞記事や国会の議事録等のビックデータを
コンピュータソフトを用いていかに分析できるか
日時：11月27日(木) 16:30〜18:00
講師：河野 武司（慶應義塾大学法学部教授）
場所：日吉キャンパス来往舎1階 シンポジウムスペース
対象：塾生・教職員（無料）
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
慶應義塾大学教養研究センター主催
情報の教養学講演シリーズ第6回
http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp

データジャーナリズムが
もたらすニュースの革新
日時：10月22日(水) 16:30〜18:00
講師：赤倉 優葉（日本ジャーナリスト教育センター）
場所：日吉キャンパス来往舎1階 シンポジウムスペース
対象：塾生・教職員（無料）
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
DATA
JOURNALISM
慶應義塾大学教養研究センター主催
情報の教養学講演シリーズ第4・5回
http://ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp
社会の課題を伝えよう！
データジャーナリズム実践講座
日時：10月25日(土) 13:00〜16:15
講師：藤代 裕之・赤倉 優葉（日本ジャーナリスト教育センター）
場所：日吉キャンパス 来往舎103教室
対象：塾生・教職員（無料）
定員：30名（募集定員を超えた場合抽選となります）
申込方法：http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/event/495
またはQRコードから
申込期限：10月23日(木)
申込条件：10月22日の講演会に参加することが望ましい。
（必須ではありません）
申込はこちらから

ice.lib-arts.hc.keio.ac.jp
日時：12月3日(水)16:30〜18:00
講師：平手 勇宇
楽天株式会社 楽天技術研究所リードサイエンティスト
場所：日吉キャンパス来往舎2階 大会議室
対象：塾生・教職員（無料）
問い合わせ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
ビッグデータ
がもたらす
E-Commerce
の変革
情報の教養学
講演シリーズ
第7回
慶應義塾大学教養研究センター主催
ユーザ数約九千万ユーザ、商品数約一億五千万商品の超大規模システムから日々生成され続けているビッグデータには、膨大な知識が含まれており、様々な分野への活用可能性を秘めています。
本講演では、日本有数の規模を誇る楽天市場のシステムから生まれるビッグデータ、およびその活用事例を示しながら、ビッグデータの可能性について探っていきます。
Yu Hirate
平手 勇宇
12・3
楽天株式会社
楽天技術研究所
リードサイエンティスト

Ⅱ　教育開発関連プロジェクト

1-1 アカデミック・スキルズ

アカデミック・スキルズは、論文作成とプレゼンテーションのスキルを身につけて貰うための少人数制授業である。2005 年度に極東証券寄附講座として設置された。以来、毎年開講されている。3 名から 4 名程度の教員で最大でも 20 人強の学生を担当する。学生間の相互啓発も期待されている。教員と学生が分け隔てなく、学び合い、教え合うという、慶應義塾の標榜する「半学半教」の実践の場でもある。

2014 年度には「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」3 クラス、「アカデミック・スキルズ(英語) Ⅰ・Ⅱ」1 クラス(いずれも通年授業、春学期Ⅰ、秋学期Ⅱ)、合計 4 クラスが開講された。

「アカデミック・スキルズⅠ」では、研究テーマの選び方・絞り方、資料の検索方法などを学び、4000 字程度の論文を作成する。「アカデミック・スキルズⅡ」では、「Ⅰ」の成果を踏まえて、その上積みをはかり、8000 字程度の論文を完成させる。併せてプレゼンテーションの仕方を考究し実践する。英語のクラスもそれに準ずる。以上の骨格をふまえたうえで、さらなる肉付けは各クラスの担当教員に任されている。2014 年度も各クラスごとに工夫が施された。グループ学習を行う、教員のミニ講義を挿入する、等々である。

2014年度の担当教員は以下の通り。水曜5時限が、大出敦、小野裕剛、片山杜秀、渡名喜庸哲。木曜 5 時限が伏見岳志、熊野谷葉子、種村和史。金曜 5 時限が徳永聡子、原大地、治山純子。火曜 3 時限(英語クラス) が鈴木亮子、ノッター・デビッド、ファロン・ルース、エインジ・マイケル。

この授業の最終成果は 例年、秋学期の期末試験期間明けに開催されるプレゼンテーション・コンペティションと論文コンペティションで示される。各クラスの代表が、プレゼンテーション、若しくは論文で研究成果を問う。プレゼンテーション・コンペティションは 2015 年 2 月 5 日に行われた。菊池廣之極東証券会長にもご臨席を賜った。審査対象になったのは「アカデミック・スキルズⅠ・Ⅱ」3 クラスから出場した各 2 名、計 6 名。結果は、金賞が牧晃平君 (経 2、金曜クラス履修)、銀賞が瀧本悠貴君(法 2、水曜クラス履修)。銅賞が原七海君(法 1、金曜クラス履修)。論文コンペティションの審査は例年通り非公開で行われ、結果発表はプレゼンテーション・コンペティション内でなされた。結果は、銀賞が矢部絵莉香君（文 1、木曜クラス履修)、銅賞が上野浩君（経 1、水曜クラス履修)。なお各クラスの学生が秋学期に制作した論文は、『アカデミック・スキルズ 2014　学生論文集』に収載されている。それからアカデミック・スキルズの過去の履修者が生みだした成果として、慶應義塾大学日吉キャンパス学習相談員著、慶應義塾大学教養研究センター監修『学生による学生のためのダメレポート脱出法』(慶應義塾大学出版会）が 2014 年秋に刊行された。

（片山杜秀）

プレゼンテーション・コンペティション金賞の発表

1-2 身体知：創造的コミュニケーションと言語力

2005 年度に発足した「身体知」プロジェクトの成果の 1 つに、文科省大学教育推進プログラム（教育 GP)「身体知教育を通して行う教養言語力育成」の採択（2009 年度 -2011 年度）があり、また同プログラムの一環として、2010 年度に正規授業化された本科目がある。

参加型・体験型の授業を通して、知力と身体感覚を相互的に磨き、言語力と非言語的コミュニケーション力の双方を育てるとともに、創造性を高めることを目的とする新しいタイプの科目である。学生たちに集中して特別な体験をしてもらうため、そして、年齢も人生経験も大いに異なる通学課程の学生と通信教育課程の学生が出会える豊かな教育的交流の場を作るために、夏期に集中的に行ってきた。

2014 年度も、武藤浩史（法学部）、横山千晶（法学部）を担当講師とし、8 月 13 日から 18 日まで、次のようなスケジュールで、授業を実施した。履修者数は、通学課程学生 13 名、通信教育課程学生 13 名だった。教科書として、拙著『ビートルズは音楽を超える』（平凡社新書、2013）を用い、最初の 3 日間はこれを活用してビートルズを学問的に考える視点や方法を身に付けた。その上で、3 日目後半から身体ワークショップを行い、学んだ知識を身体知（＝体験知）に繋げ、高めてゆけるように、以下のようなスケジュールで、授業を展開した。

【1 日目】
第 3 時限：イントロダクション
第 4 時限：『ビートルズは音楽を超える』1「ばらばらにそろっている」
【2 日目】
第 3 時限：『ビートルズは音楽を超える』2「つながる孤高」前半
第 4 時限：ビートルズバンドと歌う
【3 日目】
第 3 時限：『ビートルズは音楽を超える』3「つながる孤高」後半
第 4 時限：身体ワークショップ 1「ていねいに生きる」
【4 日目】
第 3 時限：『ビートルズは音楽を超える』4「つながる孤高」結論
第 4 時限：身体ワークショップ 3「Help ウォーク」と「Yellow Submarine 体操」
【5 日目】
第 3 時限：創作準備 1
第 4 時限：創作準備 2
【6 日目】
第 3 時限：創作発表会 1
第 4 時限：創作発表会 2
第 5 時限：創作発表会 3
第 6 時限：振り返り

例年通り、身体ワークショップを挟むと、教員と学生、そして学生間のコミュニケーションが俄然良くなり、自発的に、そして相互に協力しながら、何かを作り上げてゆこうという雰囲気が強くなる。それが、創作発表会の成果に繋がるわけだが、同時に、発表会でも質疑応答の時間を重視して、常に学問的な姿勢を忘れないように心がけた。　（武藤浩史）

1-3 身体知・映像

今年は初回のオリエンテーションに80名近くが参加、定員20名のところ、二倍以上の人数の学生たちが申し込んでくれるという結果となり、学生たちの映像リテラシーに寄せる関心の高さをうかがわせる幕開けとなった。

同時に最初からグループワークの中でそれぞれの強みを見事に発揮して、ピア・ラーニングの場をすぐに構築していったことが印象的であった。映像リテラシーをすでに身に付けていた学生たちは、専門家の手ほどきを受けるうちにスポンジで吸い込むように、さまざまな応用能力を自分のものにしただけでなく、初めてカメラに触れたという学生たちも、レンズを通して作られる「絵」にはそれぞれ意味があるのだ、ということをすみやかに学び取って、新しい表現形態を確実に手中に収めていった。このクラスでは学期ごとに数回ポートフォリオを提出するが、前学期の最後のポートフォリオの中で「映画の見方がまったく変わった」というコメントを書いてくれた学生が何名もいたことがその変化を物語っていた。

今ひとつ印象的だったのは、協働学習が効果的に作用したことである。去年同様、同じ文学作品をふたつのグループで映像化することを試みたが、カズオ・イシグロの短編小説「降っても晴れても」のラスト・シーンを映像化するという難題を前期のうちに与えたのも、自己と他者に対峙する確かな目がすでに前期前半のポートフォリオで養われているのを講師陣が見て取ったからである。

後期の作品には思い切ってアイザック・アシモフの『われはロボット』の中の短編のひとつ「うそつき！」を選択した。SF作品をこの映像クラスで取り上げるのも初めてのことであるが、21世紀はまさに「ロボット」の時代でもある。この「ロボット」という他者でありながらも自己の投影にもなりうる存在をどう皆が解釈し、映像化するのか（あるいは可視化しないのか）が、焦点となった。

今年も脚本の部分では松井周氏（劇作家、劇団「サンプル」主宰）と映像作家の小泉明郎氏の協力を得た。このお二人の丁寧な実技指導は、専門家の「伝える力」を教えを受ける中に見出す意味でも、学生にとって非常に意義のあることである。

映像作品は個人で作るものではなく、グループで作るものである。その中で否が応でも自分の考えをはっきり言わなくては先に進まない場面が何度も登場する。そんな中、TAの山田健人君はいつでも学生たちのよき理解者、アドバイザー、そして教師として活躍してくれた。このクラスは多くの協力の下に出来上がるまさに「身体と心を通した授業」であるといえよう。

（横山千晶）

1-4 生命の教養学

この授業科目を企画・運営するにあたって念頭に置いている方針は、2013 年度報告でも参照した 2012 年度報告からの引用で示すことができる。「1) 科目名にある「生命」をあらゆる学問分野によってアプローチ可能なだけ広い意味をもつ概念として捉えること。2) 年度ごとに、その広い意味での「生命」現象にとって本質的と思えるサブテーマを設定すること。3) そのサブテーマをめぐって人文科学、社会科学、自然科学等をそれぞれに代表する研究者にお話しいただくこと。4) そのお話を承けて、受講する学生に「教養」的視座から「生命」について再考してもらうこと」。

講座のスタイルは、2012 年度以来採用しているオムニバス講義形式とした。サブテーマは、コーディネーター一同（本報告書末尾の「組織構成員」に記載あり）による議論のすえ、「性」に決まった。

生命現象全体においてこれほど本質的・根本的なテーマもないだろう。しかし、本講座ではなぜか、性は正面から扱われたことがこれまでなかった。中等教育で教わる「性教育」とは一線も二線も画す「教養としての性」への手ほどきの役割を果たす講座を提供することを目指し、コーディネーター一同で講義内容を大まかに構想したうえで、ゲスト・スピーカーとなるかたがたにご登壇を依頼した。

ご快諾くださったのは次の 11 名のかたたちである（敬称略、肩書きは当時［ただし「慶應義塾大学」は省略］）。斎藤環（筑波大学医学医療系教授）、松本緑（理工学部准教授）、長谷川由利子（元商学部准教授）、梅川純代（日本大学非常勤講師）、石井達朗（名誉教授）、小堀善友（獨協医科大学越谷病院講師）、佐々木玲子（体育研究所教授）、鈴木透（法学部教授）、岡真理（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）、大串尚代（文学部教授）、長沖暁子（経済学部准教授）。

受講者は前年度より 20 名ほど増加し、60 名弱だった。脱落者はほとんどなく、各回の質疑とミニレポート、全体を総括するディスカッション、期末の筆記試験にもほぼ全員が前向きに取り組んだ。

講義録『生命の教養学 11　性』も鋭意準備中であることを付記する。

最後に一言。私（高桑）は、3 年にわたって占めた本講座企画委員長の座をこの 2014 年度で下り、赤江雄一さんに後をお任せすることになった。これまでさまざまな形でご協力くださった皆さまに、この場を借りてあらためてお礼申しあげたい。

（高桑和巳）

佐々木玲子氏（6 月 6 日）

大串尚代氏（6 月 27 日）

長沖暁子氏（7 月 4 日）

1-5 身体知：音楽

「身体知：音楽Ⅰ・Ⅱ」は、音楽を通じて築き上げてきている歴史および文化を、実践を通じて学ぶことを目的としている。成果発表は、主に公開演奏会という形で行ってきており、演奏会には、社会還元の意味合いをも持たせてある。2014 年度は、ブクステフーデによる受難の音楽《われらがイエスの御身体》全曲演奏会を含む計 6 公演を催した。公開演奏会は、具体的に次の日程で行った。

① 2014 年 7 月 21 日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム・古楽アカデミー演奏会､「古楽器で奏でるシュメルツァーとビーバーの器楽作品～ 17 世紀オーストリア室内楽の饗宴～」、② 2014 年 12 月 14 日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミー@ヨコハマ創造都市センター、③ 2015 年 1 月 15 日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム合唱団、アカデミー声楽アンサンブル演奏会「三善晃へのオマージュ～合唱曲とピアノ曲による～」④ 2015 年 1 月 11 日：慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミーオーケストラ演奏会、⑤および⑥ 2015 年 2 月 28 日・3 月 1 日：慶應義塾大学コレギウム・アカデミー声楽アンサンブル演奏会「ドイツ･バロック受難音楽 ブクステフーデ《われらがイエスの御身体》全曲演奏」。

「身体知：音楽Ⅰ・Ⅱ」は、専門的な音楽訓練を行う授業として設置され、教養教育の一環の音楽芸術の良き理解者を、未来社会に派遣するということを目指している。専門の音楽家と協同しながら学び、音楽が人間の身体を通じて伝えてきた身体知と文化の歴史を、身をもって学生たちに身に付けてきてもらっている。また、この授業は開講当初から、継続的な学習ということを重視し、複数年にわたり授業に参加する学生が多くいる。これは、参加者が音楽の理解をより深めているということだけでなく、後から授業に入ってきた学生を指導するというような好循環が生まれてきている。地域貢献という視点からは、活動は確実に浸透しており、必ずしも知られているとはいえないが歴史的に重要な音楽作品の価値を、一般の方々に伝えてきている。

最後に、授業を通じ学生たちは、それぞれが果たしている役割を認識し、自分がどのような行動をとれば、全体として最も良いパーフォーマンスを挙げることができるかということを考えられるようになってきているという点を挙げておく。これは人間力の養成そのものであり、これこそが、慶應義塾大学教養研究センターが目指してきた｢身体知｣であるといえる。　（石井　明）

2 実験授業

1. 精読と創作を通した新しい文学教育

自由研究セミナー「アーサー王研究会：アルフレッド・テニスン「シャロットの女」の精読から創作へ」において、春学期は Alfred Tennyson の“Lady of Shalott”の詩、秋学期は夏目漱石の『薤露行』を精読し討論を重ねた。春学期は学術言語を学び学生は作品解釈を深めるためにレポートを執筆、秋学期には創作を行い学外講師の指導のもと編集ソフトを用いて編集製本する過程を学んだ。教員と専門家のアドバイスを受けながら第 3 校まで作品を練り上げ表現を磨く時間を確保できたため、学生の言語力を鍛え作品への理解力を深めることができたことは大きな成果である。2015 年 2 月 4 日には一年の締めくくりとして、学生は自分の作品を作者の視点から創作作品の構成と世界観、人物の名前の由来、めざした人物像などを分析的に説明しパワーポイントを用いて発表を行った。塾内外から 15 名程度の参加者を得て、アンケート結果も好評であった。今後の展望としては、春学期においてさらにテニスンの「シャロットの女」に影響を受けたアーサー王文学作品や作品研究を調査収集し、学問体系の中で作品理解を深めるカリキュラムの充実化を図りたい。　学生の作品は「アーサー王研究会創作文庫」として冊子体と Web 版で公開している。(http://arthuriana.info/)

（不破有理）

2. ワークショップ「シェイクスピアを遊ぶ！」

6 回目を迎える「シェイクスピアを遊ぶ！」シリーズは「から騒ぎで大騒ぎ？（Much Ado About Shakespeare: Creating Comedy from Much Ado about Nothing'）」を副題としてコメディ『から騒ぎ』を題材とした。去年と同じく、オクスフォード大学から古代史の教授のニール・マクリン氏をお迎えしたほか、今年はオクスフォード大学で哲学を教えるアンナ・モルモドーロ氏も講師に加わった。参加者も慶應義塾大学の学生のみならず、ネイティブ・スピーカーを含む外部からの方々も多く、非常に活気あるワークショップが展開された。

ワークショップでは、このコメディのハイライトとなる場面をいくつか選び出し、グループごとで異なった演出を施して身体一杯に演ずることで、それぞれの解釈の違いなどを浮き彫りにした。シェイクスピアには触れたことがないという参加者にもぐっとこのコメディの世界が身近になるひと時であった。

（横山千晶）

3. 講義・フィールド・グループワークを組み合わせて学ぶ「日吉学」

●活動内容

2013 年に開始した「日吉学」は講義とフィールドワーク、グループディスカッションによって知識を体験と結び付け日吉の自然、地理、歴史を総合的に学ぶ試みである。2014 年は拡充版を「日吉で遊ぶ　日吉を学ぶ」と題して、春学期の土曜の午後に全 7 回 実施し、のべ 30 時間近い授業となった。4 月 26 日には「グループワークを効果的に進めるためのワークショップ」を SDM 研究科の神武直彦氏の指導のもと、普通部生から大学院生、社会人学生の初対面混成チームでテーマを見出し解決策をスキットで提示するワークショップを行い、5 時間に及ぶ熱気に包まれた内容となった。5 月 10 日と 5 月 17 日は生物学の福山欣司氏、長沖暁子氏、有川智己氏が指導し日吉の森を探索し撮影・記録をとり地図にまとめて生物ホットスポットを紹介、最も美しい風景を探すランドマークの決定などの活動を行った。6 月 7 日は地理班太田弘氏の主導により「探せ！ 日吉の『スリバチ地形』」と題し、今を時めくスリバチ地形の権威、皆川典久氏と石川初氏をお迎えして詳細な等高線入りの特製日吉地図を読み解き、梅雨の豪雨をものともせず日吉を歩き、14 日は GPS によって地上絵を描くために日吉を走って学んだ。21 日、28 日は日吉の歴史編で安藤広道氏を中心として大西章氏、都倉武之氏の指導の下、21 日は戦争遺跡の地下壕と寄宿舎を見学、なぜ海軍は日吉を選んだのか考察し、28 日は日吉地下壕で勤務経験者をお招きしてお話を伺い戦争遺跡をどのように継承すべきかグループで議論をした。最終回の 28 日には皆勤賞の普通部生 1 名に「日吉学修了書」、2 名に敢闘賞を日英両言語版で授与した。

●成果と今後の展望

実験授業「日吉学」の特色は、授業形式・参加学生の年齢構成・教授陣の多様さにある。異なる専門分野の教員が日吉学のプログラムを共同で策定し自分の担当以外の講義・フィールドワークに参加することにより教員自身、慶應義塾と日吉キャンパスについて学ぶことができただけでなく、義塾内に蓄積された研究と教育手法を学び合うことができ、今後、専門を生かした教養教育の教授法を体系的に築くことが期待できる。

一貫校生と大学生の混成グループの活動は参加者相互に相乗効果があり、中高生の新鮮な発想は全体討議にも刺激を与えた。アンケートによれば、「新しい発見があった」との答えは毎回 90％以上で、「講義を聞いてフィールドワークの理解が深まった」との回答、およびフィールドワークがグループワークに「役立った・大変役立った」との回答が毎回 90％近くあり、座学と観察体験とディスカッションが有機的に機能した様子がうかがえる。また「大変楽しかった」「楽しかった」と感じた回答者も毎回ほぼ全員で、楽しみながら、日吉の成り立ちを自然・地形・地理・歴史の観点から俯瞰的に掘り下げて学ぶことができたといえる。本プログラムは未来先導基金に採択され、日吉の新しいキャンパスマップに日吉学の成果が盛り込まれて刊行されることも 2014 年度の大きな実りといえる。

（不破有理）

第 1 回（4 月 26 日）

第 6 回（6 月 21 日）

3「学び場」プロジェクト

学習相談アワー（ピア・メンター）

2008 年より始まった学習相談の取り組みも、本年度で 7 年目を迎えた。

ピア・メンターの自主的な努力の積み重ねにより、学生の認知度も増し、活動も軌道に乗っている。本年度は 17 名、うち学部生 11 名、大学院生 6 名がピア・メンターとして登録し、春学期は 5 月 7 日から 7 月 21 日まで、秋学期は 10 月 1 日から 1 月 16 日まで（月から金の 13:00~18:30）、相談活動が行われた。春学期の相談件数は 309 件、秋学期は 245 件の合計 554 件で、安定した相談件数を維持している。

ポスター、チラシに加え、ピア・メンターがアカデミック・スキルズの授業に赴き、学術的なレポート作成にまさに取り組んでいる学生に対して、学習相談の紹介を行った。また、春秋学期それぞれピア・メンターによるレポートの書き方講座がメディアセンター内で開催され（6 月 4 日、6 月 13 日、12 月 4 日、12 月 8 日、12 月 16 日）、いずれの回も好評を博した。これらの活動は、学習相談の認知度を上げるのにきわめて効果的であった。

相談活動を通して積み上げた、学生が大学での学習・レポート作成においてぶつかる共通の問題とそれに対する効果的なアドバイスの仕方についての貴重な知見を用いて、様々な企画展示を行っている。今年度は「正しいレポートの書き方は、あります」、「プレゼンなんてこわくない！」の展示を行った。さらに、それをもとに数年がかりでまとめた書籍『ダメレポート脱出法』（慶應義塾大学出版会、2014）がついに刊行された。レポートの書き方・ノートの取り方・スケジューリングの大切さなど、大学における学びを徹頭徹尾学生の視点に立ってアドバイスする書籍は類がなく、大きな反響を呼んでいる。これまでの学習相談の総決算と言える成果である。

昨年度に引き続き、慶應義塾のピア・メンタリング・システムの新たな展開を模索する試みとして、他キャンパスのピア・メンタリング活動（矢上キャンパスの S-Circle、SFC の WRC）との連携を行った。「慶大生よ、何処へ行く？――先輩からきく進路戦略――」というタイトルのもと、3 キャンパスの相談員が一同に集まり、トークセッションが行われた（12 月 10 日）。各キャンパスのピア・メンター達が、どのような思考と経過を経て、自分の進路を決定したかを具体的に語った。大学に入ったばかりで、自分の将来の進路について明確なビジョンを持てないでいる学生たちにとって、先輩達の経験は大きな刺激になったようであった。今後もそれぞれ独自の特徴を持つ 3 キャンパスの活動が交流を続けることで、慶應義塾の半学半教は豊かな内実と多様性を持ったものになっていくであろう。　（種村和史、大出敦）

4-1 教員サポート

教員サポート講演会

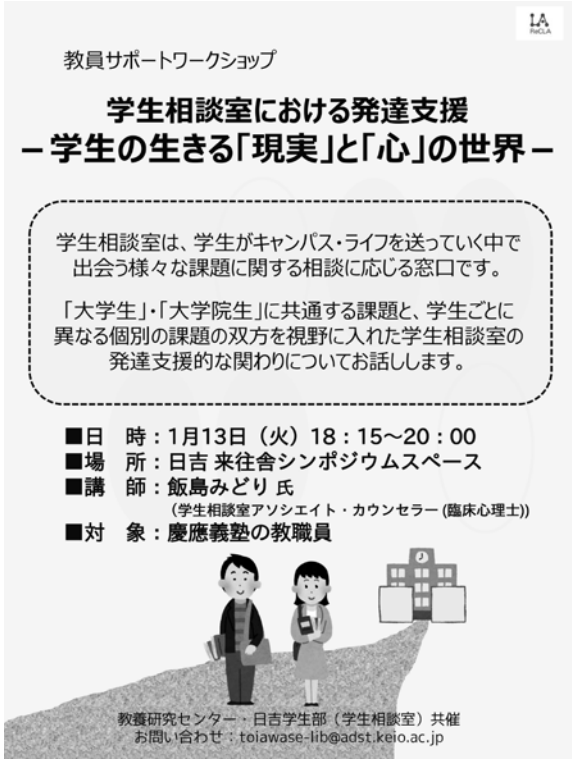
現在、大学を巡る研究・教育環境は大きな転換点を迎えている。それにともない大学生の生活環境や精神環境も一昔と比べてみても、大きく変化しており、教職員はこうした新たな状況に日々直面している。一方、慶應義塾内のさまざまな部署、部門は大学の研究・教育環境の変化、学生がぶつかる諸問題などに対応し、そのノウハウは蓄積されてきている。教養研究センターでは、さまざまな問題の解決法やそのための設備を随時紹介することで、それぞれの部署、部門、あるいは教員、職員が問題解決のための連携を図り、ネットワークを構築できるようにする目的で、「教員サポート講演会」を随時開催している。

これまでは情報ネットワーク関係の講演会と学生の心の問題に関する講演会を二つの柱として展開してきたが、本年度は、学生の心の問題を扱った学生相談室との共催による講演会のみとなった。

2015 年 1 月 13 日に教養研究センターと日吉学生部（学生相談室）との共催で、「学生相談室における発達支援――学生の生きる『現実』と『心』の世界――」と題して、飯島みどり氏（学生相談室アソシエイト・カウンセラー）により講演が行われた。講演では学生相談室の紹介から始まり、青年期に遭遇するさまざまな心の問題がまず解説された。その上で慶應義塾大学の大学生、大学院生によく見られる心の問題や学業、進路、就職、対人関係の問題などが具体的に指摘された。そしてこうした問題を抱え込んでしまった学生に対して、学生相談室がどのように学生をサポートし、学生とともに問題を解決していっているかということが紹介された。

講演後の質疑応答では、教員、職員から教室や窓口で実際に出会う学生の対応などの多くの質疑が飯島氏に寄せられ、丁寧に応答していただいた。また教員、職員の間でも意見の交換と情報の共有がなされ、学生の支援に学生相談室を核に教職が連携していく必要があることが改めて確認された。なおこの飯島氏の講演会の模様の詳細については、CLA アーカイブズ 31 を参照されたい。

（大出　敦）



飯島みどり氏ワークショップ

4-2 研究の現場から

2011 年から始まった来往舎の研究者交流サロン「研究の現場から」は、毎回 2 名の所員が自分の研究を紹介し、和やかな雰囲気のなかで意見を交換するという企画である。2014 年度は例年どおり 3 回開催した。概要は以下のとおり。

■第 1 回　2014 年 6 月 10 日（火）
講師：川添美央子（商学部）
「感情と社会形成──スピノザを手がかりに」
講師：近藤康裕（法学部）
「D・H・ロレンスの work における work について」

商学部の川添先生は、「感情の中にも受動感情から能動感情へのグラデーション」があるというスピノザの考えを手がかりに、受動感情と能動感情がそれぞれどのように共同性を生み出すかをお話くださった。法学部の近藤先生は、工業化する英国社会と文学者がいかに対峙したかという視点から、D・H・ロレンスの小説『恋しい息子たち』の「前書き」を分析し、そこには work= 労働／作品というテーマがあることを指摘された。

■第 2 回　2014 年 11 月 11 日（火）
講師：鎌田由美子（経済学部）
「イスラーム美術と日本──染色品と漆器を中心に」
講師：荒金直人（理工学部）
「客観性について──ラトゥールの科学論を手掛かりに」

イスラーム美術を専門とする経済学部の鎌田先生は、江戸時代に伝えられたペルシアやインドの絨毯が、日本の工芸に与えた影響について紹介された。イスラーム圏の代表的なデザインであるメダイヨン文をたどると、それが日本産絨毯や讃岐漆器のデザインに使われているという解説に加え、福澤諭吉の遺愛品である讃岐漆器の硯箱にもこの文様が見出されるという、最新の発見を報告してくださった。フランス哲学が専門の荒金先生は、ラトゥールの科学論に基づきながら、主観／客観という二項対立的な理解の捉えなおしを試みられた。科学的客観性ゆえに「正しい」ととらえがちな現代の風潮に疑義をただすスリリングな話だった。

■第 3 回　2014 年 12 月 15 日（月）
講師：小林拓也（理工学部）
「私の研究紹介：ルソー、スイス、フランス語教育」
講師：藤谷道夫（文学部）
「ダンテ『神曲』の数的構成について」

理工学部の小林先生は、研究の柱とされている「フランス語教育」「スイス」「ルソー」の 3 点について紹介してくださった。とりわけ、思想家として名高いルソーを植物学者としてとらえると、また異なる人物像が浮かび上がってくる点がとても興味深い話だった。文学部の藤谷先生には、ダンテの『神曲』に関する最先端の研究を紹介してもらった。数の宗教的な意味に導かれたダンテが、象徴的数やその倍数を対称的かつ緻密に詩に織り込みながら創作したという、最新の解釈を解説してくださった。コンピューターを駆使する時代になってはじめて明らかとなった発見とダンテのあまりに壮大なプロジェクトに参加者一同驚きを禁じえず、この日は夜遅くまで議論が続いた。

（工藤多香子）

5 庄内セミナー

●参加メンバー、事務担当部門

不破有理(経・教セ所長)、大出敦(法・教セ副所長)、小菅隼人(理)、横山千晶(法)
小磯勝人(大学出版会)、日水邦昭(教セ)

●目的、背景

教養研究センターでは山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパス（以下、TTCK）を拠点として2008年以来、09、10、12、13年度、そして5回を迎える2014年度も引き続き未来先導基金公募プログラム「庄内セミナー」として開催した。セミナーの目的は「教養力」すなわち「自立・自律力」と「社交力」の涵養を通した「教養」の基礎体力作りにある。その主要な趣旨は、①TTCKを拠点として新たな「学びの場」を開発すること、②豊かな自然に囲まれ、歴史・文化・人の織りなす多彩な「生命(いのち)」に恵まれた庄内をフィールドとして多角的に「生命」について考え、対話・議論を交わす機会を提供すること、③現地での体験プログラムや講義、地元との交流を通して知的な吸収力・消化力、広範なコミュニケーション力を養うこと、の三点にある。

●活動内容

2014年度は以下の活動を行った。

(1) 事前説明会：8月6日実施
(2) 事前課題：(【テーマ】生命の源と死を想い、「生きること」を考える)のレポート提出。
(3) 合宿セミナー:8月28日から8月31日(3泊4日)。プログラム概要は次の通り。
　①「生命」に関するマインドマップの作成
　②井奥洪二氏(化学者・経済学部教授)による「即身仏――身体を考える」をテーマとした講義・対話と議論。
　③日本人の死生観――即身仏をめぐって：即身仏拝観佐藤弘明氏（注連寺住職）による解説、鈴木正崇氏（日本山岳修験学会会長・文学部教授）による「羽黒修験」の講義・対話と議論。
　④修験体験：山伏による解説と指導によって一日修験体験。
　⑤庄内文化論：さまざまな文化遺産・松ヶ岡開墾場など歴史的施設見学、酒井忠久氏（致道博物館館長）と東山昭子氏（鶴岡総合研究所研究顧問）による「庄内の文化と言語」をテーマとした講義・対話と議論。致道館における富樫恒文氏（統括文化財保護指導員）の指導の下、荘内論語の素読体験。
　⑥先端生命科学研究所見学：「生命」にまつわる最先端研究の体験・対話と議論。
(4) 事後課題・報告書（レポート集）作成：【テーマ】(「生命」を考える)について、庄内セミナーを通じて体感・体験したこと、考えたこと、話し合ったことなどを基礎として、各自の「生命観」(「死生観」「身体観」など)について論述し体験と思索を言語化する。課題レポート集を兼ねた報告書の発行。
(5) 関連企画の実施：日吉図書館、大学生協（日吉）の協力を得て、6月に関連書籍の展示、学生健保主催の朝食サービスで庄内米を提供。

●成果

①羽黒修験・即身仏などに見られる伝統的な死生観からTTCKの先端生命科学研究所の活動に見られる先端的な「生命」観に至る広範な「学び」の体験。
②地元との交流によって、参加者の「地方・地域」への眼差しの広がりとそれによる相対的な視点の獲得(自立・自律力の涵養)。
③社会人や多様な学部と学年の学生参加による世代間交流の体験およびグループワークによるコミュニケーション力の涵養(社交力の育成)。
④フィールドワークを通じた体験的な「学び」の重要性の認識。
⑤対話と議論を通じた言語化と発信能力の向上。

●参加学生の声

・「生命に関して本当に考えさせられる3泊4日でした。時が過ぎ、この体験の記憶が薄れようとも、ここで得た経験や素晴らしいと感じたことは、絶対に一生私の中で残ります。」(経済学部2年)
・「慶應に入って良かったベスト5に入る位の素晴らしい体験をさせて頂きました。この経験を、東京での生活や自分の人生に生かせるよう、今後も精進します。様々にお力添え下さった方々には、心から感謝申し上げます。」(文学部3年)

●活動内容の広報状況

①地元紙の報道：荘内日報の一面に二日間カラーの特集、また山形新聞に記事掲載。慶應義塾の

庄内における教育活動の広報に貢献。

②センター WEB 更新：タイトル「人・土地・知をつなげる　庄内セミナー　庄内に学ぶ「生命」のつながり――心と体と頭と――」
URL：http://keio-up.net/shseminar/archives2014.html

③刊行物：学生によるレポート集と「2014 年度未来先導基金公募プログラム「庄内セミナー」報告書」

④ YouTube に公開：これまでの庄内セミナーの実録をもとに総集編ともいえるプロモーションビデオを慶應義塾 DMC による撮影編集によって制作公開。

（不破有理）

Ⅲ　交流・連携関連プロジェクト

1 カドベヤ

オルタナティブスペース「カドベヤ」は、2010 年 4 月にコトラボ合同会社と慶應義塾大学により共同で設立された。同年 6 月より毎週火曜日の夕方、からだを動かすこと（ダンス、体操等）、ことばをかけること（詩、手紙の創作等）、ともに食べることでつながる「動く教室」を開催し、近隣の寿地区、石川町の住民、横浜で働く人々、学生など様々なバックグランドを持った人たちがアートを通して一つ屋根の下で交流することを目指してきた。この活動は、慶應義塾大学における文部科学省大学教育推進事業の社会連携活動の一部として行われたものであり、同教育推進事業は 2012 年 3 月末日を持って終了となるに伴い、大学の教育コンテンツの一環として（法学部設置科目「人文科学特論」および「人文科学研究会」）「動く教室」にかかわってきたメンバーと学生が協力して、コンテンツの提供を継続することで、毎週火曜を「オープン DAY」とし、より多くの人々が地元の居場所としてカドベヤを活用できる仕組みを整えてきた。カドベヤでの新しい活動では、学生とともに以下のように 4 点の目標を掲げた。

1. 継続的な「居場所」を提供し、「空間」と「時間」を共有する。
2. 「想像」を「創造」へとつなげる。
3. 誰でもが企画者となれ、その実現に参加者全員が協力する。
4. その過程で町、社会の中での自分の「居場所」を見出していく。

これらの目標を達成するために、本年度行った活動は主に以下の 4 つに分けられる。

1. 交流場所の提供（具体的には午後の「足湯カフェ」の開催と 19 時からの「ストレッチと夕めし」）
2. アーティストのみならず参加者も、ワークショップのファシリテイターとなる「誰もが主人公」の実践
3. 地元の子供たち、親たちを積極的に受け入れる（子供のみまもりと夏休みの親子企画の実践）
4. 横浜国立大学との合同ゼミの開催

これらの取り組みを実現するために石川町中区・南区界隈に住む人々（寿地区の住民を含む）、横浜で働く人々、NPO 団体、アーティストなどさまざまな人々が平等に関わり、これらの目標を実行に移す場がカドベヤであるとして、学生たちもそのかかわりの中に入っていった。以下具体的にこの 4 つの活動の説明を行う。

活動 2 に関しては、アーティストが中心となるワークショップだけではなく、「誰もが企画者となれる」ことを目標に、参加者がやってみたいことを皆で広げて、参加型のワークショップや集いをより広く実現した。具体的には二つの活動を展開した。ひとつは障がいを持つ参加者たちがワークショップの案内人を担当するときに積極的に学生たちが進行の手助けをすること。そして自分たちもまた、人をまとめていくワークショップの案内人を担当することである。ワークショップリーダーのあり方に関しては、授業の中で各自が構成したワークショップを体験し、意見を出し合うことで、障がいのある方々をも巻き込んだ場作りを考察していった。活動の 3 はカドベヤに訪れる子供たちの見守り、および夏休みを利用しての親子企画の実現である。今年も庄内地方からの土人形の作り手をお招きして、8 月に土人形の絵付けのワークショップを就労継続支援 B 型事業所「てふてふ」（主に知的および精神障がいをかかえる人々の自立を助ける事業所）とカドベヤで行い、学生たちが運営にかかわった。

これらの研究と実践の成果は横浜国立大学教育人間科学部の齋藤麻人研究会（社会学）との合同ゼミを月一回カドベヤで行い、調査・研究発表を行うことで、客観的に考察した（活動 4）。合同ゼミには、カドベヤの運営者であり、寿地区で活動する社会企業家、コトラボ合同会社代表の岡部友彦氏にも臨席願い、実践の場からの忌憚のない意見もいただき、場作りのかかわる人として学生たちの教育に携わってもらっている。

（横山千晶）

Ⅲ　交流・連携関連プロジェクト

2 日吉行事企画委員会（HAPP）

日吉行事企画委員会（HAPP）は、春学期は主に新入生歓迎行事、秋学期は公募企画行事を行っている。新入生歓迎行事は、HAPP が催し物を企画している。それぞれのイベントは、主として依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだりしている。その一方で、秋学期の公募企画では、塾生・教職員から企画を募集し、応募された企画の中から HAPP が、審査の形で選抜を行う。企画の募集は、新年度開始後行い、綿密な企画書を提出してもらった後、夏休み前までには、選考を終了する。主催者として日吉行事企画委員会は、①安全であること、②大学として行う価値のあるものを開催することの 2 点について常に留意している。

2014 年度の新入生歓迎行事は、前年に続き、舞踏公演や各種講演会などを主催した。新入生歓迎行事としては、次の 6 つを主催した。

① 2014 年 4 月 12 日：「日吉キャンパス体力測定～君の秘めた能力を探せ～」
② 2014 年 4 月 16 日：「中嶋夏舞踏講演〈煙のように　灰のように〉――Like Smoke Like Ash」
③ 2014 年 4 月 21 日：講演会「〈ことばの世界〉ことばの力が必要なとき（講師：安西祐一郎）」
④ 2014 年 4 月 25 日：講演会「〈物語の世界〉古英語叙事詩とホビットの冒険（講師：伊藤盡）」
⑤ 6 月 15 日：2014 FIFA WORLD CUP ブラジルパブリック・ビューイング「日本代表を応援しよう！！」
⑥ 2014 年 7 月 21 日および 9 月 27 日：「日吉音楽祭 2014」

企画を実施するにあたり、2011 年度に再改訂した以下の理念に基づき企画を実施した：

新入生を中心に全学生を対象として、さまざまな企画を通じて多様な「知」の在り方を提示し、大学のみならず生涯にわたる「学習」の意味と可能性を考える機会を提供することを目指す。各種行事は「心と体と頭と」を総合テーマとし、(1) 知識・言語表現偏重型学習からの脱却、(2) 学生・教職員による一体型の活動の展開、(3) 地域・社会への大学・キャンパスの開放の 3 点を目標としている。

（石井　明）

中嶋夏舞踏講演（撮影：慶應義塾大学アート・センター）

〔春の新入生歓迎行事〕

NO.	企画名	日程 / 場所
1	日吉キャンパス体力測定～君の秘めた能力を探せ～ 対象：慶應義塾大学生・大学院生	4 月 12 日（土）10:45 ～ 14:30 （12:15 ～ 13:00 除く） 陸上競技場・協生館体育施設
2	新入生歓迎行事 「中嶋夏舞踏公演〈煙のように 灰のように〉 ──Like Smoke Like Ash」	4 月 16 日（水）18：15 ～ 20：00 〔開場 17：30〕 来往舎イベントテラス
3	新入生歓迎講演会 「〈ことばの世界〉ことばの力が必要なとき」 講師：安西祐一郎 （慶應義塾元塾長･大学名誉教授、独立行政法人日本学術振興会理事長）	4 月 21 日（月）18：15 ～ 20：00 〔開場 17：30〕 来往舎シンポジウムスペース
4	新入生歓迎講演会 「〈物語の世界〉古英語叙事詩とホビットの冒険」 講師：伊藤盡（信州大学准教授）	4 月 25 日（金）18：00 ～ 19：30 〔開場 17：30〕 来往舎中会議室
5	2014 FIFA WORLD CUP ブラジル 日本代表を応援しよう！	6 月 15 日（日）　9：00 ～ 12：00 協生館藤原洋記念ホール
6	日吉音楽祭 2014	9 月 27 日（土） 藤原洋記念ホール

〔秋の公募企画〕

NO.	企画名	日程 / 場所
1	Little Talks（演劇企画）	11 月 14 日（金）、15 日（土） 来往舎イベントテラス
2	8Hands'Piano Performance（4 人によるピアノ演奏会）	12 月 16 日（火） 来往舎イベントテラス

プロジェクト――交流・連携関連プロジェクト

日吉キャンパス公開講座運営委員会

2014年度日吉キャンパス公開講座ではテーマ「言葉と想像の翼」の下、10月4日から12月6日まで8週、計16名の講演を行った。例年以上に多くの申込を受け、幅広い層の受講者が毎回熱心に聞き入っていた。また、各講義で、履修者と講師の間で有意義な質疑応答が交わされた。

哲学、文学、映画、演劇、手話、身体、動物、脳等といった多様な専門領域から、日常用いる「言葉」と「想像力」に、新たな問題が提起される。コミュニケーションのツールという狭い枠から「言葉」を解放し、その可能性を探る視野が、大学ならではの学際的な連続講義によって示されたのではないか。

【2014年度】「言葉と想像の翼」

概要：現代の社会や文化では、対面や電話や手紙といった「顔や声や手」を感じさせる言葉のやりとりから、瞬時に世界中でつながる情報通信メディアに重点が移り、「言葉」はこれまでとは異なる意義を持つようになっています。言葉はけっして単なるツールではありません。言葉とそこに息づく「想像力」（イマジネーション）を主題に、「人間とは何か」という問題を、様々な角度からもう一度考えてみましょう。

講座は土曜開講、各回90分×2コマ、全8回、受講申込は全8回セット（受講料8,000円）とし、定員300名に対し受講者数401名、全回出席者数79名（23%）、平均年齢は60歳（最高齢87歳、最年少15歳）であった。

各回の詳細は以下の通り。

10月4日

3時限　「『言葉』とは何か？　想像・存在・創造の哲学」納富信留（文学部教授）

4時限　「天使の形而上学――井筒俊彦とリルケ」若松英輔（文芸評論家）

10月11日

3時限　「現代詩と想像の翼」朝吹亮二（法学部教授）

4時限　「ニッポン映画の英語字幕／吹替における想像と創造」井上逸兵（文学部教授）

10月18日

3時限　「第二言語で創作をする」吉田恭子（立命館大学文学部准教授）

4時限　「手話言語と『語り』による『ろう文化』の継承」松岡和美（経済学部教授）

11月1日

3時限　「意味の空洞化――文化史的アプローチの可能性を探る」フィリップ・コミネッティ（商学部准教授）

4時限　「身体は語る……言語の先にあるもの」香瑠鼓（振付家、アーティスト）

11月8日

3時限　「動物のコミュニケーション――イルカを中心に――」森阪匡通（東海大学創造科学技術研究機構特任講師）

4時限　「精神医学の言葉と秘密：アイデンティティの生成現場」北中淳子（文学部准教授）

11 月 15 日

3 時限　「想像とは何か――想像と言語とイカロスの翼――」荒金直人（理工学部准教授）

4 時限　「子供はなぜ詩人なのか：脳科学と言語学から考える言語発達」
皆川泰代（文学部准教授）

11 月 29 日

3 時限　「クリエイティブ・イマジネーション」
石井力重（アイデアプラント代表）

4 時限　「（脱）劇的言語の想像力」
平田栄一朗（文学部教授）

12 月 6 日

3 時限　「中国伝統演劇の『言葉』と『想像』」
山下一夫（理工学部准教授）

4 時限　「脳科学から見た創造性のメカニズム」
茂木健一郎（脳科学者、ソニーコンピュータサイエンス研究所上級研究員）

（納富信留）

1　教養研究センター 運営委員会委員

2014 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日在籍者
第 7 期（2013 年 10 月 1 日～ 2015 年 9 月 30 日）

教養研究センター担当常任理事
　　長谷山　彰
教養研究センター所長
　　不破有理（2014 年 9 月 30 日まで）
　　小菅隼人（2014 年 10 月 1 日から）
教養研究センター副所長
　　大出　敦
　　種村和史（2014 年 9 月 30 日まで）
　　片山杜秀（2014 年 10 月 1 日から）
　　篠原俊吾（2014 年 9 月 30 日まで）
　　工藤多香子（2014 年 10 月 1 日から）
教養研究センター事務長
　　武内孝治（2014 年 5 月 31 日まで）
　　吉川智江（2014 年 6 月 1 日から）

文学部長　関根　謙
経済学部長　中村慎助
法学部長　大石　裕
商学部長　金子　隆
医学部長　末松　誠
理工学部長　青山藤詞郎
総合政策学部長　河添　健
環境情報学部長　村井　純
看護医療学部長　太田喜久子
薬学部長　望月眞弓
文学部日吉主任　斎藤太郎
経済学部日吉主任　青木健一郎
法学部日吉主任　下村　裕
商学部日吉主任　英　知明
医学部日吉主任　南　就将
理工学部日吉主任　萩原眞一
薬学部日吉主任　杉本芳一
体育研究所所長　石手　靖
日吉メディアセンター所長
　　横山千晶
外国語教育研究センター所長
　　鈴村直樹（2014 年 10 月 31 日まで）
　　七字眞明（2014 年 11 月 1 日から）
自然科学研究教育センター所長
　　小林宏充

日吉研究室運営委員会委員長
　　成田和信（2014 年 9 月 30 日まで）
　　小宮英敏（2014 年 10 月 1 日から）
日吉キャンパス事務長
　　富山優一
日吉学生部事務長
　　黒田修生
日吉メディアセンター事務長
　　市古みどり
日吉キャンパス事務センター課長
　　今村江里子
極東証券寄附講座運営委員会委員長
住友生命保険寄附講座運営委員会委員長
　　不破有理（2014 年 9 月 30 日まで）
　　小菅隼人（2014 年 10 月 1 日から）
基盤研究（慶應義塾大学教育カリキュラム研究）座長
　　佐藤　望
基盤研究（社会・地域連携）代表
　　羽田　功
基盤研究（身体知プロジェクト）座長
特定研究（教育ＧＰ）代表
　　武藤浩史
日吉行事企画委員会（HAPP）委員長
　　小菅隼人（2014 年 9 月 30 日まで）
　　石井　明（2014 年 10 月 1 日から）
日吉キャンパス公開講座運営委員会委員長
　　納富信留（2014 年 4 月 1 日から）

2　教養研究センター 組織構成員

2014 年 4 月 1 日～ 2015 年 3 月 31 日

所長：不破有理（経・2014 年 9 月 30 日まで）
小菅隼人（理・2014 年 10 月 1 日から）
副所長：大出　敦（法）
種村和史（商・2014 年 9 月 30 日まで）
片山杜秀（法・2014 年 10 月 1 日から）
篠原俊吾（法・2014 年 9 月 30 日まで）
工藤多香子（経・2014 年 10 月 1 日から）
コーディネーター：斎藤太郎（文）、佐藤　望（商）、
武藤浩史（法）、羽田　功（経）、長田　進（経）、
高桑和巳（理・2014 年 9 月 30 日まで）、
赤江雄一（文・2014 年 10 月 1 日から）、
鈴木晃仁（経）、横山千晶（法）、
前野隆司（SDM 研究科）、高田眞吾（理）、
小菅隼人（理・2014 年 9 月 30 日まで）、
石井　明（経・2014 年 10 月 1 日から）、
新島　進（経・2014 年 3 月 31 日まで）、
納富信留（文・2014 年 4 月 1 日から）、
鈴村直樹（経・2014 年 10 月 31 日まで）、
七字眞明（経・2014 年 11 月 1 日から）、
不破有理（経・2014 年 10 月 1 日から）、
種村和史（商・2014 年 10 月 1 日から）、
篠原俊吾（法・2014 年 10 月 1 日から）、
富山優一（キャンパス事務長）、
武内孝治（教セ事務長・2014 年 5 月 31 日まで）、
吉川智江（教セ事務長・2014 年 6 月 1 日から）

広報担当：篠原俊吾（法・2014 年 9 月 30 日まで）
工藤多香子（経・2014 年 10 月 1 日から）

日吉行事企画委員会（ＨＡＰＰ）
委員長：小菅隼人（理・2014 年 9 月 30 日まで）
石井　明（経・2014 年 10 月 1 日から）
委員：坂本　光（文・2014 年 9 月 30 日まで）、
高橋宣也（文・2014 年 10 月 1 日から）、
石井　明（経・2014 年 9 月 30 日まで）、
不破有理（経・2014 年 9 月 30 日まで）、
下村　裕（法・2014 年 9 月 30 日まで）、
大出　敦（法・2014 年 10 月 1 日から）
佐藤　望（商）、竹内美佳子（商）、
森吉直子（商）、
小菅隼人（理・2014 年 10 月 1 日から）
小宮　繁（理）、森　泉（理）、杉山由希子（理）、
石手　靖（体研）、徳村光昭（保セ）、
富山優一（キャンパス事務長）、
今村江里子（運営サ）、加賀斉天（運営サ）、
山崎健二（学生部）、篠塚憲一（学生部）、服部剛久（学生部）、
市古みどり（日吉メディアセ）、酒見佳世（日吉メディアセ）、
日水邦昭（教セ）、
尼崎彰男（社会・地域連携室・2014 年 5 月 31 日まで）、
高橋　剛（社会・地域連携室・2014 年 6 月 1 日から）

極東証券寄附講座運営委員会
委員長：不破有理（経・2014 年 9 月 30 日まで）
小菅隼人（理・2014 年 10 月 1 日から）
委員：大出　敦（法）
種村和史（商・2014 年 9 月 30 日まで）
片山杜秀（法・2014 年 10 月 1 日から）
篠原俊吾（法・2014 年 9 月 30 日まで）
工藤多香子（経・2014 年 10 月 1 日から）

「生命の教養学」企画委員：
企画委員長：高桑和巳（理・2014 年 9 月 30 日まで）
赤江雄一（文・2014 年 10 月 1 日から）
委員：片山杜秀（法・2014 年 9 月 30 日まで）、
山下一夫（理・2014 年 10 月 1 日から）
高桑和巳（理・2014 年 10 月 1 日から）
鈴木晃仁（経）、小野裕剛（法）、
小瀬村誠治（法）、高橋幸吉（商）、
鳥海　崇（体研）、
佐藤聖（慶大出版会）、
武内孝治（教セ事務長・2014 年 5 月 31 日まで）、
吉川智江（教セ事務長・2014 年 6 月 1 日から）

日吉キャンパス公開講座運営委員会
委員長：新島　進（経・2014 年 3 月 31 日まで）、
納富信留（文・2014 年 4 月 1 日から）、
委員：不破有理（経・2014 年 9 月 30 日まで）
小菅隼人（理・2014 年 10 月 1 日から）、
大出　敦（法）、
納富信留（文・2014 年 9 月 30 日まで）、
石井　明（経）、秋山豊子（法）寺沢和洋（医）、
山下一夫（理）、前野隆司（SDM 研究科）、

佐々木玲子(体研)

住友生命保険寄附講座運営委員会

委員長：不破有理(経・2014 年 9 月 30 日まで)
小菅隼人(理・2014 年 10 月 1 日から)

委員：大出　敦(法)
種村和史(商・2014 年 9 月 30 日まで)
片山杜秀(法・2014 年 10 月 1 日から)
篠原俊吾(法・2014 年 9 月 30 日まで)
工藤多香子(経・2014 年 10 月 1 日から)
佐藤　望(商)

教養研究センター事務局

武内孝治(事務長・2014 年 5 月 31 日まで)
吉川智江(事務長・2014 年 6 月 1 日から)
日水邦昭、山口　中、傳　小史

3　2014年度の主な活動記録

	Date	Events
4	3 日	教養研究センター設置科目全体ガイダンス
	12 日	【HAPP 企画】日吉キャンパス体力測定～君の秘めた能力を探せ～
	16 日	【第 1 回 情報の教養学】脳と情報、ネットワーク、創造性、共創
		第 1 回所長副所長会議
	21 日	【HAPP 企画】〈ことばの世界〉ことばの力が必要なとき
	25 日	【HAPP 企画】〈物語の世界〉古英語叙事詩とホビットの冒険
	26 日	【日吉学】個人のアイディアを融合して革新的なアイディアを生み出すには？
5	10 日	【日吉学】日吉の森のホットスポットを探そう
	13 日	第 1 回コーディネートオフィス会議
	15 日	ニューズレター 24 号刊行
	17 日	【日吉学】日吉の森のランドマークを決めよう
6	4 日	【第 2 回 情報の教養学】データでサッカーの見方がどう変わるか！？
		レポートの書き方講座――レポートはテーマが 9 割――
	7 日	【日吉学】探せ！　日吉の「スリバチ地形」
	9 日～ 7/12	庄内セミナー関連企画「庄内フェア」開催
	10 日	第 10 回「研究の現場から」川添美央子、近藤康裕
	12 日	【学会・ワークショップ等開催支援制度】 OAH/JAAS 短期招聘研究者ワークショップ
	13 日	レポートの書き方講座――誰も教えてくれない書式・構成の作り方入門――
	14 日	【日吉学】描こう GPS 地上絵
	15 日	【HAPP 企画】 2014 FIFA WORLD CUP ブラジル　日本代表を応援しよう！！（パブリックビューイング）
	19 日	【第 3 回 情報の教養学】データで貧困を考えよう
	21 日	【日吉学】探訪、日吉の戦争遺跡
	28 日	【日吉学】日吉で学ぶアジア太平洋戦争
7	2 日	第 2 回所長・副所長会議
	5 日	学びの連携プロジェクト「本の世界への探索法ワークショップ」
	21 日	【HAPP 企画】日吉音楽祭 2014：古楽器で奏でるシュメルツァーとビーバーの器楽作品
		～ 17 世紀オーストリア室内楽の饗宴～
	28 日	2014 年度日吉学 反省会
	31 日	生命の教養学 X『新生』刊行
8	6日	第 2 回コーディネートオフィス会議
		「庄内セミナー」参加者事前説明会
	28日～31日	第 5 回「庄内セミナー」
9	4 ～ 5 日	初年次教育学会@帝塚山大学東生駒キャンパス
	10 日	第 1 回運営委員会
	17 ～ 19 日	【学会・ワークショップ等開催支援制度】第 9 回日独スポーツ科学会議
	27 日	【HAPP 企画】日吉音楽祭 2014：「室内楽・ピアノ」マラソンコンサート
10	3 日	第 3 回所長・副所長会議
	4 日～ 12/6	【日吉キャンパス公開講座】言葉と想像の翼＜全 8 回 16 コマ＞
	11 日	【学会・ワークショップ等開催支援制度】日本・スイス国交樹立 150 年記念国際シンポジウム
	14 日	【学会・ワークショップ等開催支援制度】タイグ・オドゥーラーニャ氏講演会
	22 日	【第 4 回 情報の教養学】「データジャーナリズムがもたらすニュースの革新」
	25 日	【第 5 回 情報の教養学】「社会の課題を伝えよう！データジャーナリズム実践講座」
	28 日	2015 年度日吉学打ち合わせ

	Date	Events
11	1、2日	Much Ado About Shakespeare: Creating Comedy from Much Ado about Nothing'
		シェイクスピア喜劇ワークショップ「から騒ぎで大騒ぎ」
	8日	学びの連携プロジェクト「交渉力体験ワークショップ　ハーバード×慶應流交渉学」
	9日	【学会・ワークショップ等開催支援制度】東方アジアにおけるイスラームの諸相――思想・美術・コレクションシンポジウム
	11日	第11回「研究の現場から」鎌田由美子、荒金直人
	12日	第3回コーディネートオフィス会議
	14日	【HAPP企画】Little Talks
	27日	【第6回 情報の教養学】計量テキスト分析のすすめ
	30日	ニューズレター25号刊行
	29日、12/3	【学会・ワークショップ等開催支援制度】日吉電影節2014
12	3日	【第7回 情報の教養学】ビッグデータがもたらすE-Commerceの変革
	5日	第4回所長・副所長会議
	9日	【HAPP企画】8 Hand's Piano Performance
	10日	3キャンパス合同トークセッション「慶大生よ、何処へ行く？――先輩からきく進路戦略――』」
	13日	【学会・ワークショップ等開催支援制度】ワークショップ「ジャン＝ピエール・デュピュイの思想圏――カタストロフ、科学技術、エコノミー」
	15日	第12回「研究の現場から」小林拓也、藤谷道夫
	20日	【HAPP企画】“塾長と日吉の森を歩こう”
	23日	「モーツァルトの弦楽四重奏曲とメンデルスゾーンの弦楽八重奏曲」～弦楽四重奏セミナー成果発表演奏会～
1	7日	モーツァルトとプラハ～慶應義塾大学コレギウム・ムジクムオーケストラ演奏会
	9日	第5回所長・副所長会議
	11日	慶應義塾大学コレギウム・ムジクム古楽アカデミーオーケストラ演奏会
	13日	教員サポート「学生相談室における発達支援――学生の生きる「現実」と「心」の世界――」
	15日	三善晃へのオマージュ～合唱曲とピアノ曲による～慶應義塾大学コレギウム・ムジクム合唱団、アカデミー声楽アンサンブル演奏会
	24日	学びの連携プロジェクト「パターン・ランゲージの体験ワークショップ」第6回所長・副所長会議
2	4日	第6回所長・副所長会議
	4日	第4回コーディネートオフィス会議
		ピア・メンター反省会
		アーサー王研究会 2014年度学生創作公開発表会 テニスン『シャロットの女』翻案
	5日	【極東証券寄附金講座アカデミック・スキルズ】プレゼンテーション・コンペティション
	28日	ドイツ・バロック受難音楽 ブクステフーデ《われらがイエスの御身体》全曲演奏会～アカデミー声楽アンサンブル演奏会～
3	1日	ドイツ・バロック受難音楽 ブクステフーデ《われらがイエスの御身体》全曲演奏会～アカデミー声楽アンサンブル演奏会～
	4日	第2回運営委員会
	7日	【学会・ワークショップ等開催支援制度】ろう者と聴者が協働する手話言語学ワークショップ
	20日	ダートマス大学教授による講演会『超一流リベラル・アーツカレッジの教え方』
	30日	第7回所長・副所長会議
	31日	CLAアーカイブズ刊行、アカデミック・スキルズ学生論文集刊行

慶應義塾大学教養研究センター
2014年度 活動報告書

2015年8月31日発行
編集・発行　慶應義塾大学教養研究センター
代表者　小菅隼人

〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1
TEL 045-563-1111（代表）
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp
http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/

編集・制作　慶應義塾大学出版会
印刷・製本　（株）太平印刷社

©2015Keio Research Center for
Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。
ISBN978-4-903248-49-3